

研究、メディア研究、科学技術史のいずれにおいても、大変意義ある内容と言えるだろう。こうした書籍が刊行され、それを日本語で読めることを素直に喜ぶたい。

(千葉 悠志 日本学術振興会特別研究員 (PD))

Amelia Fauzia. 2013. *Faith and the State: A History of Islamic Philanthropy in Indonesia*. Leiden: Brill, xxx+346pp.

イスラームの根幹をなす五行のひとつであるザカート(義務的喜捨)や、サダカ(自発的喜捨)、ワクフ(寄進財産)などのイスラーム型社会扶助制度を挙げるにつけ、イスラームは弱者救済的な性格を持つ宗教であるといわれる。本書は、それらの制度の中で、とりわけザカートに注目し、インドネシアを対象としてイスラーム型社会扶助システムの実践の歴史と現在を考察したものである。

福祉国家の危機が叫ばれた1970年代以降、福祉は国家のみが提供するものではなく、むしろさまざまなセクターが各領域を担う複合的なものであるという議論がなされており、近年盛り上がりを見せている市民社会論においても、それらのセクターの重要性がしばしば指摘される。また、そもそもイスラーム世界の大部分においては、西欧列強の支配以降、国家による福祉制度が十分に機能しない状態が長らく続いてきた。イスラーム型社会扶助システムの核をなすザカートは、国家の制度として機能していた近代以前とは異なり、近年、草の根的慈善団体などの市民コミュニティーがその担い手として台頭してきている。その意味で、上記の市民社会論やイスラーム世界における代替的福祉制度として、イスラーム型社会扶助がますます重要な役割を期待されてきているといっても過言ではない。

著者の Amelia Fauzia 氏は21世紀初頭から、インドネシアにおけるザカートやインファーク(扶養のための支出、インドネシアではサダカに近い意味で用いられる)、ワクフといったイスラーム型社会扶助制度について研究しており、この分野では第一人者のひとりといえる。著者は、ジャカルタにあるイスラーム州立大学(Syarif Hidayatullah State Islamic University)在籍時に、ムスリム社会における慈善の社会的正義についてエジプト、インド、インドネシア、トルコ、タンザニア、イギリスでも調査をしており、ジャワ語、マレー・インドネシア語、アラビア語、英語、オランダ語についても堪能であるので、インドネシアにとどまらない多角的な視野でイスラーム的社会扶助について研究しているといえる。ちなみに本書は、著者が2008年にオーストラリアのメルボルン大学に提出した博士論文を加筆・修正したものであり、この中でも多言語資料が駆使されている。

ところで、本書の副題にみられる“Islamic philanthropy”について、著者は、イスラームの理念および実践され続けている他者への利他的活動や奉仕の活動という意味合いで用いている。著者は従来用いられてきた“charity”の語に代えて、“philanthropy”という言葉を選択的に使用した理由について二つ挙げている。一つ目は、この語が徳行や慈悲的行動をも内包するという点である。“philanthropy”という語を使用することによって、学問的に十分注目されているザカートファンドやワクフ機関に比べ、軽視されているのが否めないボランティアやサダカなどの施しという意味も積極的に評価できるのだという。二つ目は、“charity”と比べると、“philanthropy”の方が広いタイムスパンを包含できるという点である。“charity”が、災害救援などの早急な必要に応じる短期的な

支援を意味するにとどまるのに対して“philanthropy”は、社会を力づけ、貧困や社会問題を根源から撲滅するような、長期支援をも含意している。なお、著者が研究を始めた当時、インドネシアには“philanthropy”に対する適当な訳語がなく、“charity”を意味する“kedermawanan”しかなかった。この語では長期的支援の意味を網羅しえないと感じた著者は、“*filantropi*”という造語をインドネシア語に導入し、今では広く浸透してきているという。評者も、このような著者の考え方にもとづいて、本稿では“Islamic philanthropy”に対しては「イスラーム型社会扶助」、「Islamic charity」に対しては「イスラーム的慈善」という訳語を使い分けることにする。

本書は7章で構成されており、インドネシアにおけるザカートを中心としたイスラーム型社会扶助システムの沿革を時代順に論じている。以下、各章を概観していく。

第1章では、イスラーム初期(黎明期)におけるザカート管理やワクフなどのイスラーム型社会扶助の価値と実践について簡潔な歴史的背景とともに概説している。クルアーンやハディースの節を用いた詳細な理念的説明とともにイスラーム初期のザカート管理の実践などが描かれており、この説明はのちのインドネシアにおけるイスラーム型社会扶助についても汎用できる基礎となる部分である。そして、インドネシアにおけるイスラーム化とイスラーム型社会扶助の歴史について13世紀から21世紀初期までを巨視的に概観している。

第2章では、ザカートやワクフ、サダカといったイスラーム型社会扶助制度がいかにしてインドネシアに導入、浸透されてきたかについての見識を述べている。ここでは、ザカートが統治者によって宗教的にも経済的にも政治的にも実践されてきた過程を描いている。著者の叙述からは、ザカートの管理は完全に統治された一枚岩のようなものではなくて、国の強制と不干渉の間で様々な形をとってきたことがわかる。

第3章は、オランダ統治期である19世紀と20世紀初頭におけるイスラーム型社会扶助の実践に焦点を当てている。ここでは、非ムスリムによる宗教的に中立な統治体制の下でのイスラーム型社会扶助の実践について述べている。著者は、この時期、政府の宗教への不干渉によって全体的にはイスラーム型相互扶助制度が活性化したことを示している。

第4章では、ムスリムによるコミュニティを基盤とするイスラーム型社会扶助の改革の試みと発展について述べられている。ここではオランダ統治時代にイスラーム型社会扶助の実践に挑み続けたイスラーム復興団体であるムハンマディーヤの活動が紹介されている。この章の事例も世俗国家におけるイスラーム型社会扶助の発展を示しているといえよう。

第5章では、スカルノやスハルト大統領による旧・新憲法時代に、イスラーム型社会扶助が政府指揮下に置かれるようになってきた点について示している。著者によると、新憲法時代は政府の力が強く、コミュニティ基盤の社会扶助団体が、イスラーム型社会扶助を担う余地はあまり残されていなかったという。しかしながら、地方ではコミュニティ基盤の扶助システムが根強く現存していた。このことは、組織化された社会扶助団体をあまり好まない人々にとっては、政府主導の公式な組織が誕生しても慈善をその公式的の団体に一元化することは容易には受け入れられなかったことを示唆している。

第6章では、ポスト新憲法時代におけるイスラーム型社会扶助の新しい展開が論じられている。ここでは、イスラーム型社会扶助に関して伝統的に強い優勢さをもつ市民社会が、脆弱な国家によるザカートの制度化に反対したり、逆に国家が力を持ってくると、権力をもってしてザカートを国家主導のファンドに賦課する法案を通そうとしたりするなどの国家と市民社会間の拮抗する社会的な動きを具体的な事例を紹介しつつ、描写している。

第7章は、本書の結論として、インドネシアの沿革の中で、イスラーム型社会扶助は国家と市民社会のバランスの中ではぐくまれているという構図を明らかにしている。著者によると、国家や政治の権力が強まれば、たとえば福祉財源としてザカートの運営を希求するが、国家がカバーできないところの社会扶助は草の根的団体やその伝統の中で維持されるという。そして逆に、国家が脆弱になりザカート管理への関心、関与が弱まれば、ムスリム市民社会が強くザカートの実践、再分配機能を担っていくという。つまりインドネシアにおけるイスラーム型社会扶助、特にザカートにおいては、トップダウン方式と市民社会のボトムアップがせめぎあい、補完し合ってきたといえる。イスラーム型社会扶助においては、このような個人やコミュニティの信仰と、国家のバランスが大事であり、インドネシアの事例はそのことを顕著に示しているともいえる。このような分析視角は本書のタイトルである *Faith and State* (信仰と国家) にまさに如実に表れているであろう。なぜならイスラーム型社会扶助というのは、精神的な義務であるとともに、社会に対する公的な責任でもあるからだ。つまり題名の「信仰と国家」というのは「私的と公的」とも訳すことができ、実践的な宗教であるイスラームの慈善を描く上で本質をとらえ、大変示唆に富む題名付けであるといえる。

本書はインドネシアにおけるイスラーム型社会扶助システムの沿革と実践を、詳細な調査で裏付けながら明瞭に捉えた良書である。しかしながら、今後のザカート研究、イスラーム型相互扶助研究の発展を射程に入れて課題を挙げるとするならば、以下に二点挙げられる。一点目は、本書においてザカートへの言及がザカート・マール(金銭的な定め)の喜捨に限定されていることだ。著者は一貫して国とコミュニティにおけるザカート・マールの垂直的關係にのみ言及している。しかしながら、本書がほとんど触れなかったもう一つの重要なザカートとして、ラマダーン後の実物を用いた喜捨として知られるザカート・フィトルがある。確かに、ザカート・フィトルは米や食料品といった実物を用いての少量の喜捨(一人当たり2.2キログラム)であり、かつファンドなどを通さずにモスクに直接支払うことがほとんどであるため、物資の流れも、本書が依拠する文献学的アプローチでは追いきれない。しかし、このザカート・フィトルの実践の全容を明らかにすることにより、コミュニティ内での水平的な関係も描け、より国家と社会におけるザカートの全体像をつかみやすくなるのではないかと考える。これは、フィールドワークをその手法の中核に位置づける地域研究が担うべき課題であろう。

二点目は、本書がインドネシア研究としての優秀さを持ちつつも、世界的に勃興しているイスラーム経済や現代イスラーム復興の文脈で広く論じられなかった点である。初期イスラームにおける記述はあるものの、本書は、終始インドネシアにおけるイスラーム型社会扶助システムにのみ焦点を当てているので、ほかの国との比較やイスラーム復興における位置づけなど、語学に堪能で多角的な研究をしてきた著者だからこそもう少し野心的に挑戦できる点もあったのではないかと考える。

これらの課題は指摘できるものの、国と市民社会が互いにけん制、補完しあって成り立っているイスラーム型社会扶助の均衡を描き出した著者の試みは、社会における市民やコミュニティの役割を考察する際の一つの視座になりうる。この点からも、本書はイスラームにかかわる研究者やムスリムのみならず、周りの弱者に対して責任を持つと考えるさまざまなひとにとって示唆に富む内容であろう。

(足立 真理 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)